CYRニュース No.23

幼い難民に未来を

発行：幼い難民を考える会　〒150 東京都渋谷区広尾4-3-1　TEL 03-499-1226　●振替口座　東京1-36227

魚とりをする子どもたち。（カンボジアのコンポンチャム州にて）

難民が難民でなくなる日をめざして

10年目を迎えたCYRの活動

保育センターの歩み

CYRが、タイにあるカンボジア難民キャンプ〈カオイダン〉で始めた保育センター「希望の家」の活動も今年で10年になります。

1980年4月に10人の保育者養成から始めたこのプロジェクトは、同年末には、キャンプ内に2か所の保育園を開園するにいたりました。1981年3月までには、木工、洋裁、織物の技術訓練の教室もでき、保育園を中心とした「保育センター」の形が整いました。

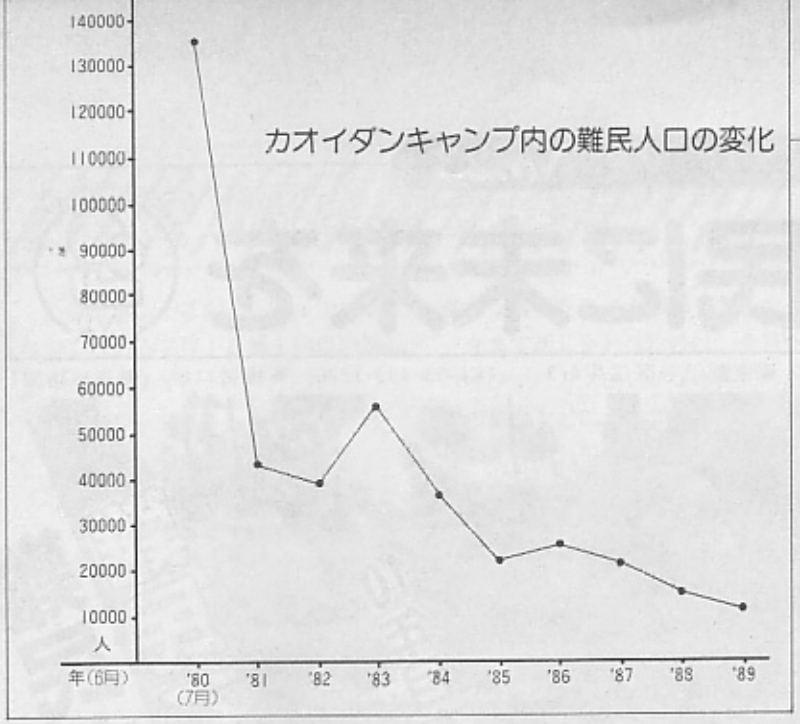
「保育センター」とは、幼い難民の健全な成長と、大人たちの自立を目的としたコミュニティーです。人びとは難民キャンプのなかで食べ物、着る物、住まいのすべてを最低限ながら与えられています。しかし、働く機会は限られています。

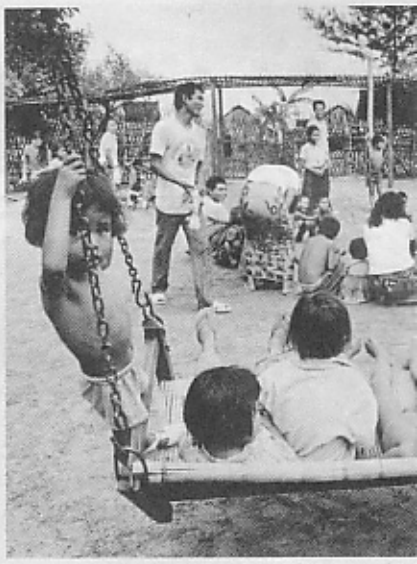
こういう難民キャンプだからこそ、大人にはものをつくる喜びと、自分たちの意思で何かができる場が、子どもには安全で、安定した環境が必要ではないか、とCYRは考えました。これが、コミュニティーとしての「保育センター」の基本です。

限られた経験をどう補うか

保育センターの活動の中心となっている保育は、カンボジアの人たちの文化、生活に根ざした形で進められています。家庭と同じような雰囲気のなかで、身近な教材を使い、豊富で楽しい経験が得られるようにと考え、実施されてきました。

保育園の対象年齢は、2歳半から





5歳となっていますが、実際には、これより小さい子どもも、大きい子どももいます。洋裁、織物教室で働いている人の赤ちゃんや、小学校が午前と午後の2部制なので半日遊ぶ場のない小学生たちもよく来ます。

保育園といってもあまり枠にとらわれず、伝統的な習慣や家庭的な雰囲気を積極的にとりいれることを心がけています。

カオイダンの9歳以下の子どものほとんどはキャンプで生まれ、育っています。キャンプの生活しか知らない子どもたちは、田んぼを耕している大人を見る機会がありません。米や水は、配給のトラックが運んで来るもの、と思っているのです。

"普通の生活"の経験がない子どもに母国の生活を知ってもらうため、保育園では保育者が布絵を使って、伝統的な行事や、踊り、農村の様子などの話をしています。また、布芝居で、昔から伝わるお話を聞かせたり、木工室で作ったカンボジアの楽器を使って、踊りやゲームをするなど、子どもたちがカンボジアの文化に触れる機会を多く作っています。

キャンプの外に出られないので、子どもたちが知っている動物や植物も、とても限られたものです。キャンプ内にあった飼育場に子どもたちを連れていったとき、牛を見て「犬だ!」と言った子どもがいたほどです。このような子どもに、保育者は家からトッケー（大きなヤモリ）や大きなヘビを持ってきては見せたり、保育園の中でウサギや魚を飼ったりしています。キャンプの外から生き物を持ち込むには限界があるので、写真の入った図鑑を見せ、たくさんの動物や植物がいることも教えています。

身近な材料で教材を

遊具や教材づくりは、木工室の大工さんや保育者たちの仕事です。日本からすでにできているものを持ち込むのではなく、身近にある竹や板、布などを使って作っています。日本の鉄棒や雲梯（うんてい）をそのまま持って行っても、タイでは、鉄の棒が熱くなってしまって使えません。その国にあった遊具・教材を、身近にある材料で作れば、こわれたときも、すぐ直せるという利点があるのです。

また、子どもたちの身近にある植物や粘土もよい教材となります。例えば野菜や木の葉などを使ったスタンプ遊び。保育者養成の講習会で紹介したときは、バナナの茎の断面の模様の美しさに、保育者も子どもも新鮮な驚きの声をあげました。キャッサバの茎で首飾りを作ったり、カーラーにしてパーマネント遊びをするのは、女の子たちが得意です。

キャンプの中にある粘土質の土を持って来て粘土遊びをするのも、子どもたちは大好きです。

どんな場所にいても工夫をすれば身近な所に教材はいくらでもあるというのが、10年間の活動の中から引き出せた結論の一つといえます。

85～86年には、家庭で使える教材セット（14種類）を量産。園児の家庭だけでなく、タイ・カンボジア国境にいる避難民にも配布しました。

リーダーシップの養成を

保育者養成、そして保育者を指導するリーダーの養成は、保育園の運営に欠かせないものです。保育センター開設当初は、保育者には、カンボジアで以前小学校の先生をしていた人が多く、なかには絵本作家や、大学で教育学を教えていた人、中学校の校長先生だった人もいました。83～4年以降は、平均3、4年の小学校教育しか受けていない保育者がほとんどで、最近は、キャンプで小学校へ行っただけという若い保育者もいます。この10代の保育者たちは、平和な時代のカンボジアの暮らしも知りません。

大きなブランコは、子どもたちに人気のある遊具の一つだ。子どもたちと保育者が興じているのは、日本のハンカチ落としに似た遊び レアック・コンサエン。撮影／石井一弘氏

母親が働く姿を見て、子どもは育っている。撮影／小林正典氏

保育センターの運営面でいちばんむずかしいのは、難民のリーダーシップを育て、援助することです。人々は難民キャンプという特殊な生活環境の中で、ずっと暮らすつもりはありません。最初から、仮の生活の場と考え、第三国へ定住したら、自分の国に帰れる日がきたら、と思い続けています。そのためにキャンプでの仕事場や住んでいる場所、グループに対する帰属意識をもてないでいます。

職場での人の入れかわりも頻繁です。第三国定住のために移動が多かった頃は、1年間のうちに、ほとんどの保育者が新しくなってしまったこともありました。こういった状況から、難民の責任者がいなくなっても、いつでも仕事が支障なく進められるよう、補佐役の人の養成にも力が入れられてきました。

家庭での教育の大切さ

保育者養成や、日々の保育園での活動を充実させるとともに、1985年からは、家庭での教育の大切さを知らせることに力をそそぎました。親に子どもの健康、成長についての理解を深めてもらうため、保育者が家庭訪問をして基本的な保健衛生習慣を指導したり、母親教室を開いて、栄養、子どもの病気、おもちゃづくり、栄養価の高い食事づくりなどの講習を行ないました。

昨年（1988年）4月、CARE（配給や補助給食を担当しているアメリカの団体）が調査した結果によれば、カオイダンにいる5歳以下の子ども570人のうち約20パーセントに発育の遅れがありました。これは、慢性的な栄養失調からくるものと思われます。また、0.9パーセントの子どもたちはひどい栄養失調の状態で、衰弱していたそうです。このような状況の子どもは、1986、87年の調査では見られませんでした。この調査結果は、家庭での教育に力をそそぐことの大切さを裏付けてくれました。

キャンプの生活が人々に及ぼす影響は、はかりしれないものがあります。特に、長びくキャンプ生活からくる精神的ストレス、閉ざされた狭い空間と密集した住居、将来の生活に対する不安、第三国へ受け入れられずキャンプにとり残されてしまったことからくる諦め、疎外感、自尊心の喪失など。これらの、親のストレスや、不安感は、必然的に子どもたちに影響を与えています。時間だけはもてあますほどあっても、イライラや、精神的なゆとりのなさから子どもたちに愛情をもって接することができなくなっているのです。子どもに対して冷淡になったり、無関心になっている親もいます。汚れた服を何日も洗わずそのまま着せたり、虐待したり、食事をさせない親さえいます。

国に戻ってもなお残る問題

1989年現在、約1万2000人の人たちがカオダンキャンプで生活しています。この人たちが、10年近い間にキャンプを出たのは数回。第三国定住の面接を受けるために35キロ離れた会場に行ったときだけです。

その第三国定住調査も、今年の5月で打ち切られました。タイ政府は、カオイダンキャンプを、残された人たちのために自主帰還センターとする方針を明らかにしています。

1986年12月にカオイダンキャンプは、公式には閉鎖されたことになっています。何度も「これで最後」といわれながらも、その後何回か定住調査が行われたため、カオイダンの住人たちは第三国定住の夢をなかなか捨てきれずにいます。今回も「5月で打ち切り」と言われていますが、実際にはどうなるのか……こういう不安定な状態が何年も続いているのです。タイ政府とUNHCR*が話し合いを続けていますが、自主帰還セ

*UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）＝難民の保護と難民問題解決のために活動している国連の機関。

カンボジアの伝統的な織りを学ぶ若い女性。撮影／小林正典氏

埼玉県川口市内の団地では、CYRとJVCが協力してお母さんたちの日本語教室と、子どもたちの勉強室を開いている。

ンターの具体的な青写真は、まだできあがっていません。

こういった不明瞭さが、いつも難民たちにつきまとっています。各国や、各派の思惑に翻弄され、自分で自分の将来を選ぶことのできないイラ立ちと不安感。難民特有の苦悩から抜け出すには、難民でなくなり、自国での〝普通の生活〟に戻るしかありません。この数年、ようやく政治的解決へと各国が動き出しています。しかし、カンボジアに戻って、平和な時代のような生活ができるのか？　暗黒の時代がくりかえされることはないのか？——そんな不安が拭いきれないのも事実です。また、カンボジアにとどまって、何もかもがなくなったところから10年かけて再建してきた人たちと、国を出て、外で10年間暮らした難民たちとの間にできると思われる溝。果たして、この溝を埋めることはできるのかどうか。——自分の国に戻ってもなお、問題はたくさんありそうです。

CYRのカオイダンキャンプでの活動は、今後の動向にかかっています。いずれにしても、難民が難民でなくなり、普通の生活ができるようになるまで、CYRは見ととどけたいと思っています。

定住者への活動3年目の課題

難民になってしまったために日本に来たインドシナの人たちの数が、5000人を越えた1987年。CYRは、国内で定住者への自立援助活動を始めました。

87年春。それ以前は、タイの難民キャンプで働いていた日本人スタッフが、帰国後、日本に定住している知り合いのカンボジアの人たちを個人的に訪ねていました。この訪問を継続的にするため、また個人では解決できない問題が起きた場合にも対応できるようにするため、会として取り組むことにしたのが「訪問ボランティア」の始まりです。

週1回、あるいは月数回、定期的に訪問し、日本語学習や、子どもの勉強の手伝いと、生活相談、料理交換などを行ないました。訪問する人のほとんどは、日本語を教えた経験がなく、試行錯誤の連続だったようです。訪問ボランティア4名、訪問家庭約30(不定期訪問を含む)で始めたこの活動も、88年末には、32名の訪問ボランティアが約70家庭を訪問。活動地域も東京都、埼玉県、神奈川県、静岡県、大阪府へと広がりました。

訪問ボランティアは、訪問を希望しているインドシナの家庭の、なるべく近くに住んでいる会員や関係者の方にお願いしています。適当な方が見つからない場合には、ほかのボランティア団体にバトンタッチすることもあります。とくに神奈川県には、訪問形式や、教室形式で日本語や学校の勉強を教えている団体が増えているので、協力関係をつくっています。

3年目をむかえる今、訪問ボランティアとインドシナの人との友人関係も、あちこちで育っているようですが、これからは、もう1歩踏み出す必要を感じています。訪問している家庭のうちの何軒かは、訪問者が行かなければ日本語を話すことがほとんどないと言うのです。日本語に限らず、ことばは、使わなければ覚えません。また、必要性がなければ覚えません。インドシナの人たちの場合、機械工、プレス工、溶接工などとして、日本語を話さなくても済む職場で働くことが多いので、日本語の必要性が高いとはいえません。

毎日新聞
1989年(平成元年) 2月15日(水曜日)
インドシナ難民に情報を
ボランティア団体 4カ国語の新聞発行
渋谷
ひらがなの新聞「こんにちはCYRです」は新聞、テレビ、ラジオで紹介され、定住者からの反響も大きかった。
'88.10.25
難民向けに平仮名新聞
暮らしの情報満載
ボランティアが発行
'88.10.22
読売新聞 郡内版

インドシナ難民の生活ガイドに

ひらがなで新聞発行

日本語が話せなくても、何とか日常は過ごせてしまうからです。ところが、病気になったり、子どもの保育園や、学校から何か連絡があったとき、仕事や住居をかわりたいときなど、日本語が話せない、読めない、書けないことの不便さに直面します。

もし隣近所に気軽に相談できる人がいれば、普段からよく話している日本人がいれば、こういう不便さは簡単に解消できるはずです。また、遠くからわざわざ日本語を教えに出かけなくても、自然に日本語が身につくはずです。

積極的な人なら、日本人のともだちをどんどんつくることができますが、内気な人は何年同じ所に住んでいても近所に日本人の友だちがつくれないようです。そういうときには、訪問ボランティアの人に、是非近所の人への橋わたし役をお願いしたいと思っています。

CYRは、訪問ボランティアの必要がなくなる地域社会をめざしています。

カンボジア語による電話相談

87年7月、カンボジア語による電話相談がスタート。日本語で表現するのがむずかしい自分の気持ちや、悩みなどをカンボジア語で相談できる窓口をつくりました。

相談を受けているミム・ソワンさんは、CYRがカオイダンキャンプで行なっている保育者養成の第1期卒業生で、1980年9月に日本に来ました。女性と子どもの問題を中心に活動しているCYRとしては、とくに、女性の悩みに応えられるようにしたいと考え、9人の子どもを持つ母親でもあるソワンさんにお願いしたのです。

87年で最も多かったのは、日本語を教えてくれる人を紹介してほしいなど、日本語の学習に関する相談でした。ついで健康・医療、子どもの教育・学習の相談の順でした。

88年には、夫婦間の問題、人間関係などの相談が増えました。これは日本人には言いにくい内容を、同国人に相談している例で、電話相談の本領を発揮したといえるでしょう。

『こんにちはCYRです』で広がった活動地域

88年9月には、日本での暮らしに必要な情報を得ながら日本語の勉強にもなる、ひらがなの新聞を発行しました。健康、子どもがかかりやすい病気、日本の料理の紹介を載せた創刊号は、日本語だけのものと、カンボジア語訳がはいったものの2種類を発行。たくさんの方から、お礼の電話や、手紙をいただきました。その中に、漢字にふりがながふってあるので読めるけれど、内容が十分には理解できない。できれば母国語（ラオス・ベトナム語）を入れてほしいという要望がありました。

そこで、第2号からは、日本語のほか、カンボジア・ベトナム・ラオス語の3か国語訳ものせました。

この新聞を発行することにより、ベトナム、ラオスの方たちとのつながりができ、活動地域も全国へと広がりました。

訪問ボランティア、電話相談、ひらがなの新聞のほか、定住者がたくさん住んでいる団地での交流会、カンボジアの料理会なども開いています。

定住者への活動も3年目を迎え、ようやく少しずつ問題が見えてきたところです。その一つ一つを整理しながら、次のステップを踏み出したいと思っています。

見えてきた問題の最大のもの、それはどうやら、異質のものを排除しようとする私たちの心の中にありそうです。私たちの心をどうすれば変えることができるのか？——3年目の課題は大きく重いものとなりそうです。

訪問ボランティア募集中//

CYRの訪問ボランティアは、定住者の家庭を訪ね、日本語の勉強や子どもの学校の補習を行なっています。興味があり、継続的に活動できる方は事務局までご連絡ください。

現在とくに下記の地域で募集しています。（　）内は最寄り駅です。

☆東京・大田区（京浜急行大森町）
日本語の勉強　平日の夜7時以降か日曜日（主婦）

☆東京・港区（銀座線青山一丁目）
中3女子の勉強　平日の夜

☎03-499-1226　担当：峯村

難民問題が教えてくれるもの

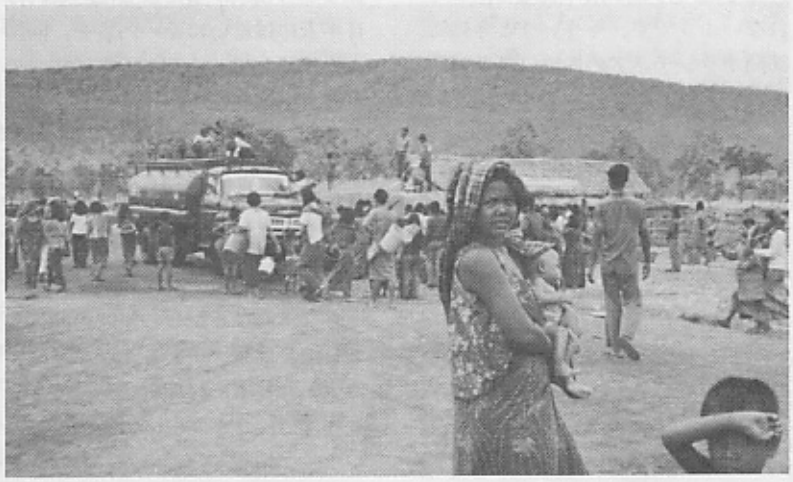
いいぎり　ゆき

6月のタイは雨季のさなかである。2年ぶりに訪ねたカオイダンキャンプは、濃い緑に包まれていた。かつて14万人もの難民が住んだこのキャンプに、今1万人を越える失意の人びとが定住生活を夢みて暮らしている。人が去り、取り壊された小屋の跡地には雑草やパパイヤが茂る。キャンプ中心部にわずかに残るニッパヤシの家並みが、じわじわと緑に取り込まれている。空き地にはキャッサバの葉が勢いよく空に向かい、キャンプのはずれにある小さな畑に、サトイモやトウモロコシの葉が心もとなげに風に揺れている。

踏み固められた赤土の道には、飢えに悩まされ、自由を求めてカンボジアから逃れてきた人々の安堵や失った家族への痛恨、新しい生活に託した夢、また失望や不安と共に、10年の歳月が刻みこまれている。ひたむきな若者や、無心な子どもたちと一緒に植えた何種類もの苗木は、目の前にある「希望の家」の園庭に大きな枝を張っている。木陰では、単調な歌に合わせ足拍子をとりながら、幼い子らが輪になって踊っている。竹囲いの保育室からは、水浴びをするグループが裸で水場へとびだしてゆく。見慣れた光景に、心のなごむのを感じているとき、手振りよく踊る浅黒い顔の中に、あどけなさとは別の、大人の顔つきに近い表情がいくつかあるのに気づいた。このキャンプは、いまもタイ兵士が見張る閉ざされた世界である。外国への定住の道を繰り返し拒まれ、長い歳月を無為に過ごしてきた人びとの心の均衡は崩れやすい。人びとの胸には、国境のキャンプやカンボジアにいつ戻されるかわからないという恐れもある。不安と緊張の連続でますます鬱積してゆく家庭内の雰囲気が、変化に敏感な子どもの心に影を落とさないはずがない。

1979年、タイ政府は、カンボジア北の国境でタイに逃れたカンボジア難民の強制送還という厳しい措置をとったことがある。当時、アメリカを初め西側諸国は、こうした事態を避けるため、タイ政府に緊急援助と難民の第三国への定住を約束した。以来、定住申請を目的に難民は外国語を学び、技術を身につけようと競った。運よくキャンプを逃れ定住したカンボジア人は22万人。日本へも940人が旅立った。しかし、残された難民にとって、自立援助をめざす技術指導のプロジェクトは、もう意味がないとさえ思えた。こうしたあきらめと無気力がキャンプに蔓延してどのくらいになるか。カンボジア問題の当事者である難民には、将来の生活設計の立てようがない。こんなとき、援助の意味を模索し、実戦する者が直視しなければならないのは、援助慣れから、苦労の多い自立を避けようとする難民の本音である。

いま、カンボジア問題はベトナムの撤兵後に向けて急速に動いている。タイ国境地域にいる約30万人のカンボジア人を初め、難民キャンプに住む人びとの帰還も近いとされている。10年もの空白をへて、カンボジアに戻る人たちがどのように暮らすのか。産業、経済、教育などの差し迫った復興計画がどう実をむすぶのか。アセアン諸国は対カンボジア援助の用意があるとしているが、援助はインドシナ地域の安定とカンボジア人の自立に結びつくのだろうか。日本は国際社会での大きな責任を期待されている。日本の援助が、ゼロから出発した国の基礎固めに役立ち、国益とのバランスを疑われない内容であってほしいと思う。日本人は地球市民としての視点に欠ける、との隣人の批判もある。これには、われわれが国際社会の一員として考える目を養うことで応えたい。家庭で、企業で、教育の場で、また地域社会で、もっと自分の感覚を働かせて自分で考えてみよう。普段着の感覚で



身のまわりにある問題を取り上げ、話し合おう。開発、環境問題、差別などどれもわれわれの生活に関わる地球規模の問題である。暮らしやすさを求めると、他人の不幸が生じる方程式には、互いの権利を尊重し、調和を図ることで答えをだそう。難民問題がいつまでも問題として残るのも、この簡単なルールが守られないからだ。

日本で暮らす外国人たちの、とくにアジアの人たちの生活を知るところから、異質が実はわれわれの側にあるのだとわかってきた。無意識のうちに、あるいは善意という言い訳で、日本の習慣ではこうするものだと一方的な押しつけで、他家にずかずかと土足で上がり込むようなことを隣人たちにしてこなかったか。最近会った、日本で暮らすカンボジアの女性のことばが心に残っている。

「小学校に入った娘を受持ちの担任の先生がかばって、娘はアジア人なのだから日本人と同じなのだと説明しました。でも、私は娘にカンボジア人としての誇りをもってほしいから、どこに違いがあり、なぜ違うのかを説明して、日本の子どもたちにカンボジアの文化について知ってほしいと言ったのです。」

差別意識は、違いを認め合う社会では、育ちにくいはずである。

アメリカに定住したラオス難民。写真提供／UNHCR

☆☆☆

海外プロジェクト責任者・関口晴美さん

TOYP大賞受賞！

CYRの海外プロジェクト責任者の関口晴美さんが、すぐれた若者たちに贈られるTOYP大賞を受賞／去る7月8日、東京の赤坂プリンスホテルで表彰を受けました。

TOYPとは、The Outstanding Young Persons（すぐれた若者たち）の意味で、この賞は政治、経済、学術、文化、芸能、社会福祉、世界平和、スポーツなどさまざまな分野で活躍し、将来を期待される10人に贈られるものです。

日本青年会議所が主催するこの賞は今年で3回目。人材発掘事業の一つとして始められたものといいます。今年のテーマは「21世紀・幸福社会への貢献」。関口さんは、世界平和の部門で「幼い難民を考える会のスタッフとして9年間、難民キャンプでの子どもたちの援助活動に功績があった」ことが評価されたものです。

今までCYRは38人の海外スタッフを派遣していますが、だいたい半年から2年間の任期で交替し、日本に帰ってきます。関口さんは80年9月に初めてタイに行って以来現在に至るまで、タイの専従スタッフとして、保育センター「希望の家」の活動をずっと支えてきました。84年からは海外プロジェクトの責任者になり、カオイダンでの活動ばかりでなく国境地域での活動、またバンコクで他団体との連絡、折衝などにもあたっています。

「地道で息の長い」CYRの活動を支えてきただけに、関口さんはおだやかで、いつもゆったりとしています。後輩を指導するときも大きな声で叱るようなことはなく、にこやかに諭すように話しているのは「さすが」というべきでしょうか。

カオイダンでの活動が一段落したら、公衆衛生の勉強をしたいというのが、現在の関口さんの夢です。これから海外で活動するためには専門技術が必要だと、3月のカンボジア国内の視察後考えたのだそうです。もう一度勉強をして新しい分野に挑戦しようという意欲的な関口さん。さらにひとまわり大きくなっての活躍が期待できそうです。

☆☆☆

開かれた条件

6月18日の、幼い難民を考える会(CYR)第9回定期総会午後の部で、「開かれた社会への条件」をテーマにパネルディスカッションが行なわれました。パネラーは、日本に住む外国人、南宮成根さん（在日韓国2世）とペン・セタリンさん（在日15年のカンボジア人）、日本の中で異文化との交流を行なっている大野力さん（相模原市国際交流協会）の3人の方です。その要旨を以下にご紹介しましょう。

南宮成根（社会福祉法人青丘社）：

私は川崎市の青丘社桜本保育園で保父をしています。私は在日韓国人です。青丘社には韓国・朝鮮の子どもたちが多く来ますが、彼らは社会で自分をさらけ出せないから荒れます。「先生は勉強しろ勉強しろと言うが、勉強しても僕らは親のように土方か韓国の焼肉屋ぐらいにしかなれないじゃないか」と言います。私たちは彼らの訴えを聞いて、その将来のためにも指紋押捺を拒否しました。

今年の正月、ある大学生が自殺しました。彼は本名と日本名を使い分けていて、本当の自分をずっとつかみかねていました。私も、日本社会は開かれつつあるような錯覚に陥ることもありますが、日常生活の中にまだまだ差別は根深く、それはなかなか日本人には見えません。私は外国籍ですが、日本に住んで社会に貢献しています。その私たちが、あるがままに生きられない日本社会はどこかおかしいと思います。

青丘社の大きなテーマは「共に生きる」です。桜本保育園にはベトナムやフィリピンの子どもも来ました。園の保育内容は、自分を明らかにしてお互いをすばらしいと認め合うものです。障害をもった子どももいます。他の子どもたちは最初はこわがりましたが、小さい頃から一緒に生きているとあたりまえのこととして受け入れるようになります。

保育園の子どもたちが大きくなって巣立つ社会が、今は胸を痛めるような社会でしかない現実をまのあたりに見て、お互いをありのままに認められるような社会をつくる具体的な取り組みが正に必要だと思います。

大野力（相模原市国際交流協会）：

相模原市には、約120人のインドシナの定住者がいます。市内にはボランティアグループ「革の会」があり、定住者の生活相談や日本語習得の手助けをしています。けれど革の会は自分たちだけが一生懸命やるのではなく、地方自治体や地域の人々の関わり方を変える必要があると考えました。そこで相模原市国際交流協会と協力して市役所と話合いました。

私たちが市に要求した点の一つは定住者で就学年齢に達した子どもに個別に通知を出すことです。しかし市は、外国人は要望がなければ通知を出さないと答えました。定住者は日本国民ではないので、義務教育の適用外であり、市が通知を出す義務がありません。このように日本は、国民と国民でない住民が法体系で区別されています。

その後小学校に行っているはずの年齢の子どもがまだ入学していないことがわかりました。市はこの未就学問題発見をきっかけに、「インドシナ難民について、1989年度から、4～5年間に限り就学通知を個別に出す」と決めました。1990年度からは3か国語の訳文も付く予定です。

もう一つは、予防接種会場に訳文付きの問診表を貼り出すことです。これもいろいろありましたが、市を説得して今年の1月から実施しています。

ペン・セタリン（カンボジアレストラン経営）：私はカンボジアから来て15年です。今はレストランを開いています。店にはいろんな国の人が来て悩みを話します。私は彼らを楽しませるため、寂しい人でも誰でも参加できる会を開いたりしました。

日本が閉鎖的な社会だと思う点はいくつかあります。たとえば政府は難民を1万人受け入れると言いながらなかなか実行しません。私の友人が帰化の申請をしたとき、自宅に調査に来た人が冷蔵庫のキムチを見つけて「こういうものを食べるのは日本人ではない」と言ったそうです。カンボジアの女性との結婚を望んだ日本人は、家族から縁を切られました。日本には外国人が多いのに、日本政府はまだ単一民族だと言ったりして、問題を良い方向にむけることを研究しません。どうしたら開かれた社会になるのか、みんなで考えたいと思います。

娘の話ですが、私は保育園の先生から、「娘さんが園にちっとも慣れないので、家でカンボジア語を話すのはやめてください。おかあさんは日

社会への

総会午後の部より

本語が話せるでしょう」と怒られました。先生の話は娘の記憶にも残ったようで、その後はカンボジア語を全く話さなくなりました。彼女が心配で、私は日本語だけを話すようにしました。彼女を別の保育園に移してからは、今度はお迎えの時に私が子どもたちから、「変な顔してる」と言われました。「当たり前よ。私はカンボジアから来たの」と答えると、「カボチャって何？」ってみんな近くに来るんですね。娘はうれしそうに、「カボチャじゃない。カンボジアだよ」と友だちに言っていました。

今私は少しずつ娘にカンボジアの衣装を着せたり、踊りを教えたりしています。でもカンボジア人なんだからとしつこくは言わないんです。逆効果だと思うから。少しずつ自分が誇りに思っている文化を伝えていこうと思っています。

——会場から

神保真理子（東京都会員）：息子が中学3年のとき警察で100円を借り、印鑑がないので指紋を押すよう言われたことがあります。彼は、8年間

アメリカに住んでいたので、指紋押捺を犯罪と結びつけて考えたようです。怒って帰宅した彼は、指紋を消すといって印鑑を持って出て行き、交渉のすえ指紋を消したと喜んで帰ってきました。日本では無神経に拇印を押させますが、自分の体の一部を使って証しとするのはどんなに嫌なことでしょう。私は部落解放運動や指紋押捺拒否者の支援運動に参加しています。日本人の意識を変えるには時間がかかりますが、そういう運動をしている人たちがいることも知ってほしいと思います。

李　姫子（大阪府会員）：私も在日韓国人で、父は軍事徴用で日本に強制連行されました。私が自分の国籍を知ったのは幼稚園の頃です。先生が

他の園児に話し、彼らが私に聞かせてくれました。私はその時朝鮮という国を知りませんでした。小学校では国籍を隠していたのにわかって、いじめられました。中学校は在日韓国人・朝鮮人が多い地域だったので、学校の方針として誇りをもって本名を名のるように言われました。私は嫌でしたが、堂々と本名を名のる子どもたちといっしょに、気負うことなく本名を名のるようになりました。

なぜ私たちが日本で最大の少数民族になったのか、インドシナの人たちが難民として世界各地に流れたのか、その歴史を考えなければなりません。教育の場で子どもたちに機会を与え、私たちも正しい歴史観を認識することが必要だと思います。

ブー・ダン・クエ（日本在住ベトナム人協会）：私は来日して18年になります。日本では定住者への理解がない地域が多いですね。これは提案ですが、CYRは地域への働きかけ

をもっと行なったらどうでしょうか。定住者のいちばんの問題は子どもの教育です。日本語が難しいので公立高校に行くのは大変です。CYRもぜひ教育の問題に力を入れてほしいと思います。日本語を学びたい人も多いので、訪問ボランティア活動は続けてください。

ホワンティ・亜紀（青丘社桜本保育園）：私は1970年に来日して、今は保母をしています。青丘社で子どもたちに本名の大切さを教えるうちに自分が日本名であるのに矛盾を感じて

今の名前に変えました。保育園にはいろんな国の子どもが集まるので、彼らがその経験を生かして成長することを願っています。

司会（深水・CYR理事）：私たちが国外の難民キャンプに出ていった時代から10年経ち、今度は国内に目を向けてみると、根の深い日本社会の

問題が見えてきました。在日韓国・朝鮮の人たちが経験した差別は、インドシナの定住者にも同じ影響を及ぼしています。問題が日本人の側にあるのは明らかです。CYRが定住者との関わりを強めていく中で、今日は日本社会を考え直す良い機会になったと思います。（文責／編集部）

※このパネルディスカッションの内容を詳しくお知りになりたい方は事務局までご連絡下さい。記録が用意してあります。

また、大野さんがお話しになった定住者への個別就学通知、訳文付きの問診表については「国際交流ニュース」臨時号（'89.6）に詳しくレポートが載っています。相模原市国際交流協会（0427-42-4406）へ直接お問い合わせください。

カンボジアの人びとの暮らしぶり

関口　晴美

プノンペンからプレイベン州に向かう途中の市場。商売しているほとんどが女性だ。

今年3月、カンボジア国内を訪れプノンペン、コンポンチャム、プレイベンの3州で保育や教育プロジェクトを見学しました。プロジェクトに携わっているカンボジアの人たちや民間援助団体の人たちからの話や、実際に見聞きした人々の生活、子どもたちの様子を報告します。

現在約75万の人たちが生活している首都プノンペンは、自動車やオートバイが道路に溢れ、日曜日や夕方には王宮前広場や川沿いの公園はスラックスやワンピース姿の若い女性や、記念写真を撮る家族連れなどで賑わっていました。公営の市場や個人商店にも衣類、タバコ、酒類やテープレコーダーにいたるまで、タイやシンガポールから入った品物が出回っており、商業経済が盛んになってきている様子がうかがえました。人口の9割が従事している農業では、伝統的な助け合いの形で労働力を分け合い、家畜や農機具を協同で使うなどして、米や野菜づくりが行なわれていました。

プレイベン市の母子保健センターでは妊婦や5歳以下の子どもの健康診断、栄養不良の子どもの補助給食、予防接種、保健・栄養教育が行なわれています。検診に来る妊婦は週約50人、子どもは月平均約300人。センターの奥の部屋では、石臼で大豆をつぶし、栄養不良の子どものための補助給食をつくっていました。こういった活動を行なっている母子保健センターは、全国に増設されており、普及率を高める努力がなされ、その成果をあげてきているということです。それでもまだ、乳幼児の死亡率は高く（1987年のユニセフの統計では、約5人に1人の子どもが5歳未満で死亡している）、マラリヤ、結核、下痢などが子どもたちの命を奪っています。病気の予防、保健教育に力を入れるとともに、医療に従事する人の養成にもより力を注いでいきたいと保健省で働く女性は話していました。

プノンペンにある国立栄養センターには、3歳児以下の乳幼児約200人が収容されています。捨て子、親のいない子ども、未婚の女性が生んだ子どもなどです。栄養障害、小児マヒの子どもたちが多くみられました。センターの責任者の30代の女性の話によれば、1979年頃、プノンペン市内の道路にはたくさんの孤児や乳児が放置されていたということです。プノンペンで訪れた3か所の託児所には、それぞれ、保健省、織物工場、機械工場で働く人の子どもたちが来ていました。働く場に併設された託児所は、1981年からつくられ始め、0～3歳の子どもを預かっていて、プノンペンには約80の施設があるということです。織物工場に付随した託児所では、植え込みのある庭で保母さんが子どもたちと歌をうたったり、木の葉を取ったり、楽しそうに遊んでいました。子どもの数は少なく、7名～20名でした。この託児所の運営で難しい点は、親が子どもを預けたがらないということです。1975年から79年までの時代に、昔からの家庭や地域での子育ての習慣が無視され、親と子どもを引き離して集団生活をさせられたため、その悪影響が人々の心に残っているのだそうです。

母子健康センターの家庭訪問活動に同行したときは、栄養不良の子どもの家庭で、栄養のある食事、病気の予防などを絵カードを使って母親に説明していました。外国人がめずらしいのか、隣近所の母親や子どもたちも大勢集まりました。タイの難民キャンプと同じように、子どもの数は多いようです。

プノンペンの裏通りで羽根けり、ゴムとびをする子ども、地方の村で魚つりや水浴びに興じる子ども、ハスの実をザルにのせて売り歩く子ども、どの子どもたちも、タイの町や村、また難民キャンプの子どもたちと同じように人なつっこい、明るい笑顔が印象的でした。

今回カンボジアを訪れ、じかに人びとの暮らしぶりを見、こういったカンボジア国内の様子を、難民の人たちに知らせたいと思いました。それは、難民キャンプでの生活しか知

らない子どもたちに1日も早く、囲いのない、普通の生活を送ってほしいからです。また、カンボジア国内では、家庭訪問のような、きめ細かい家庭や地域単位での実践活動が、これから最も必要とされそうです。そのために、実践を行なう人たちの養成がこれからますます重要になってくると強く感じました。

隔たりを感じながらも

遠藤　美智子

私は1986年9月から、1989年1月までタイのカオイダンキャンプで働いていました。

新聞でスタッフ募集の記事を目にしたのは、1984年頃だったと思いますが、その頃私は、保母の資格を得るために勉強中でした。それ以前から漠然と、難民キャンプで働いてみたいという思いがあり、そのためにと始めた勉強だったのです。記事を見てすぐに、ここだと思いました。

初めてのカオイダン入りは9月4日。赤土の道路と規則正しく並んだニッパヤシの家、そして人びとの人なつっこい笑い顔が印象的でした。地に足がつかないようなふわふわした感じで、ひとりひとりのワーカーにあいさつしてまわりながら、その表情の明るさに少し驚きを感じていました。自分の気持ちのなかに難民というのは、暗い目つきをしたかわいそうな人たちという思いがあったのです。自分たちとは異質の人間だという無意識の内の差別感を抱いていたのかもしれません。キャンプでの仕事は保育園の運営には担当者のほか全スタッフが関わりますが、他のプログラムはそれぞれ担当者を決めています。私の担当は織物プログラムの調整で、織柄を提案したり、習いに来る人たちのクラスの運営などをしていました。

赤ちゃんをあやすつもりが泣かせてしまった。

働き始めて間もない頃、初めて見る織り機や織られていく様に見とれながら、よく部屋を見て回っていました。毎日カンボジアの女性たちのおしゃべりや、子どもをあやしたりするなんでもない行動に接していくうちに、懐かしさや安堵感を感じている自分に気がつきました。こう感じたときから、自分のなかから日本人とか、カンボジア人とかいう枠が取り外されていきました。同じ人間だという当たり前のことがとても新鮮でうれしく、ひとりひとりと抱きしめ合いたいような思いになったものです。

しかし、自分はどうあがいても同じにはなれないんだなと感じる瞬間にぶつかることもありました。子どもたちは大きなブランコに乗り、保母さんにグングン押し上げてもらい、はい次はアラン、とか次は病院とかというバスごっこが好きです。あるとき、ひとりの保母さんがその遊びをやっているのを見て、私も仲間に入ろうと近くまでいきながら、何かそこへ入っていくことができない気持ちになったのです。暗黙の内に拒絶されているというのでしょうか。こういうことはほかにも何度かありました。

また、日本人スタッフが任期を終え帰国するとき、一緒に働いていたカンボジア人との別れのつらさを感じたり、難民たちの行く末を案じても所詮"感傷の域"を出ないように思ったのです。ポルポト政権下で肉親や仲間が殺されたり、死と背中合わせの恐怖の中で国境を越えてきた難民たちの過酷な体験を思ってみると、私たち自分の国へ帰る者と難民たちとの別れに対する思いというのには深い差があるように感じられ、そこでもまた結局、自分にはわかりきれない隔たりを感じていました。でもそういう思いを抱いていたからこそ、より一層キャンプの人たちに魅かれたのかもしれません。

ある意味でキャンプの人たちは幸せだなと思うこともありました。それは自分が素朴な人間関係や生活に飢えていたからなんだなと思います。もちろん、キャンプの日々の生活はきれいごとばかりではないし、たくさんの悩み、問題があるけれど、文明の発達したことにより忘れ去られようとしているものがたくさん残っていました。2年半のカオイダンの活動で得たものは大きくて、まだ頭の中でぐるぐるしているけれども、これからひとつひとつ整理をしていこうと思います。

急増する ボートピープルの影響

——短期収容のしわよせはどこに？

南シナ海で救助されたボートピープル。一九八五年撮影。写真提供／UNHCR

この数か月、日本に漂着、上陸するボートピープルが急増しています。5月から7月6日のわずか2か月の間だけでも842人。これは、昨年1年間の上陸者数の約4倍です。なぜこの時期、急にボートピープルが増えたのでしょうか？

出国の動機は、①ベトナムの経済状況が南北統一後14年たっても良くならず生活が苦しい　②すでに出国した家族と再会したい　③合法出国がしにくいなどで、なかには兵役忌避や少数民族の故の差別をあげる人もいます。

この時期に集中しているのは、6月13～14日スイスのジュネーブで開かれた「インドシナ難民国際会議」と関係があると見られています。

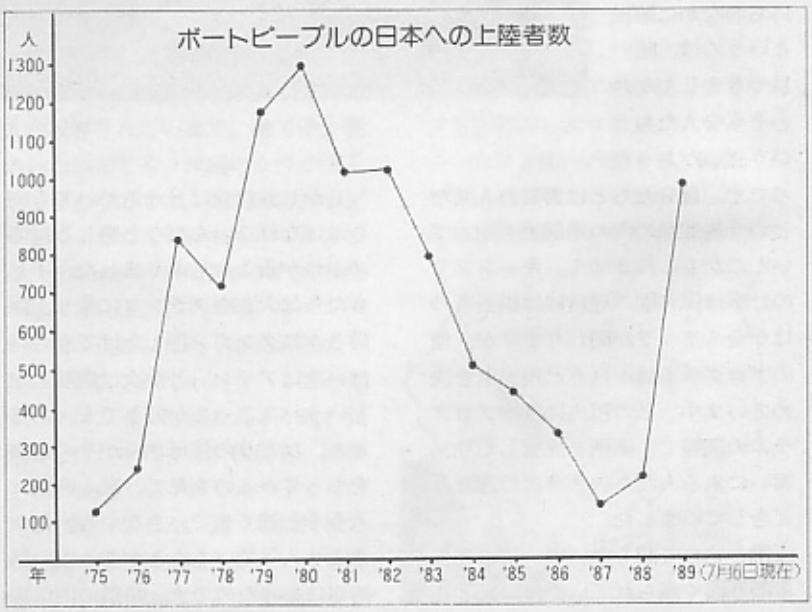
この会議は、定住先が決まらないまま東南アジアなどに滞留している難民が増加している問題を解決するため開かれたものです。ここで、主にベトナム難民の流出に歯止めをかけるため、アセアン関係国（タイ、インドネシア、フィリピン、マレーシア、シンガポール）で難民資格審査のシステムを確立させるなど8項目の「包括的行動計画」を採択しました。（『幼い難民に未来を』号外6/24で既報）つまり、難民条約で規定*されている、迫害を逃れてきた〝条約難民〟か、それ以外の理由で出国した〝難民〟かを審査し、条約難民以外は本国に帰すとしたものです。このような各国のしめ出しの傾向を察知した人々が、「今しかない」と出国し、ボートピープルとなったのではないかと見られています。

しかし実際には、3月に行なわれたジュネーブの国際会議の準備会議の段階で、1989年3月14日以前に入国したベトナム難民については第三国定住をすすめ（対象者55,000人）、それ以降入国した難民については資格審査をする方針が決まっていました。

香港ではすでに昨年6月から、難民選別政策を実施。ベトナムへの自主帰還も今年の3月から2回行なわれています。しかし、説得に応じ帰還したのはわずか143人。いまだ3万以上のベトナム人が留まっています。資格審査を実施しても本国帰還がどの程度望めるかはむずかしいところです。

第三国定住への可能性をせばめている香港やアセアン諸国に対し、日本がいつから資格審査を導入するかはまだ決まっていません。導入の時期については、国際会議で採択された項目を実施するための運営委員会（難民流出国、一時庇護国、日本を含む定住受け入れ国の15か国で構成）で決められることになります。

このため、ボートピープルの日本への上陸はますます増えることが予



＊難民条約の規定＝難民とは、人種、宗教、国籍、政治的信条などが原因で迫害を受ける恐れがあるため国外に逃れ、自国の保護を受けられない人々を言う。

想されます。

どこも満員の収容施設

このような状況のなかで日本の受け入れ態勢はどうなっているのでしょうか？

日本にたどり着いたボートピープルは、本来は福岡県大村市にある大村難民一時レセプションセンターでUNHCR（国連難民高等弁務官事務所＝難民の保護と難民問題解決のために活動している国連の機関）の面接と、健康診断を受けたのち、東京品川にある国際救援センターや、日赤、カリタス・ジャパン、立正佼成会の一時滞在施設に移ります。

しかし今回は、何百人もの人が急に来たため大村のセンターはパンク状態。面接も健康診断も受けないまま、国際救援センターや、一時滞在施設に入る人も増えています。その結果、日本以外の国への定住がほぼ決まっている人を収容していた一時滞在施設に、日本への定住希望者も入ることになり、こちらも満員状態、あるいはすでに定員オーバーの状態。カリタス・ジャパンでは、5つの収容施設の2か所にプレハブの増築を申請中。許可が降り次第着工の予定といいます。「政府からの援助がないのはおかしいと思うので何度もお願いしているのですが、お答えいただけなくて……でもともかく増築でもしないととても間に合わないのです。一般の方から衣類の援助の申し出をいただきますが、正直なところ今必要なのはプレハブをつくるお金なんです。」

難民受け入れの大元締めである政府のインドシナ難民対策連絡調整会議では、急増するボートピープルの収容に6月末、次のような当面の対策をだしました。

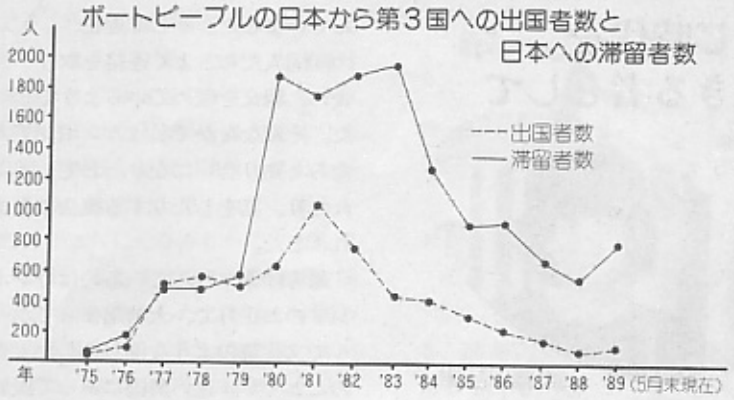
1　すでにある施設の集会所の活用や閉鎖中の民間施設の再開などで収容能力を拡張する。2　収容者の就職、住宅あっせん態勢を強化し、退所者を増やす――この2本を柱にしていますが、具体的なものはこれからといったところ。しかし、事態は「7月6日に北九州に入港した133人までは大村に何とか収容できるが、これ以上入ってきたらアウト！」と同会議のある審議官が自ら認めているところまで進行しています。国際救援センターの敷地内に施設を増築できるかどうかの視察を7月初めに行なったといいますが、これで、今後ますます増加が予想されるボートピープルに対応できるのか不安を感じざるを得ません。

もう一つ大きな不安は、「退所者を増やす」方向で、日本語教育はどうなるのかということです。

日本語教育を行なっている国際救援センターでは、5月25日に入所した人までの受講体制が整っているだけで、それ以降に入所した約400人（6月末現在）については目途がたっていません。

昨年4月、ようやく3か月から4か月に延長されたばかりというのに、日本語の教育期間を再び短縮しては……という案が有力のようです。

この案が実現すれば、日本語がほとんどわからないベトナム人が大量に日本の社会に出て行くことになります。そのとき、CYRを含めた民間団体の役割は一層大きいものとなりそうです。



ボートピープルの多くは、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパへの定住を希望していますが、この数年、日本からそれらの国々へ行ける人の数は年間200人未満。このため一時滞在の形で日本に留まる人は増える一方で、あまり長期化する場合は、日本への定住をすすめています。

また今回300人ほどいる北ベトナム出身者は、欧米では受け入れないと思われるので、日本に定住することになりそうです。

ベトナム難民
1000人を3年間で受入れ

定住受け入れ枠を1985年に10,000人に広げた日本には、約6,000人のインドシナの人たちがすでに住んでいます。（6月末現在）前述のジュネーブの国際会議で、日本政府は、ボートピープルとは別に、1,000人のベトナム難民を今後3年間で受け入れることを約束しています。

HELP!

カリタス・ジャパンへプレハブ建設のための資金協力をしてくださる方は下記にご送金ください。郵便振替東京7-95979 カリタス・ジャパン「ベトナム難民のために」と明記。

同じ時代を生きる者として

埼玉県
上尾市

武藤 志津子

私が米国に暮らしていた1970年代後半は、ベトナムやラオス、カンボジアなどから多くの難民たちが米国に流入し、新しい生活を始めようとしていたときでした。

彼らは、市立の成人学校で無料で、英語や料理、タイプなどを学んでいました。そして近在の同国人たちとよく連絡を取り合い、親交を暖めているようでした。そんななかで私はカンボジア人たちと知り合いになり、お宅へ呼ばれたり、話をしたりする機会に恵まれました。

最も印象に残っているのはカンボジアのお正月で、大勢集まってホールで文化祭のような催しをしたときのことです。遠い異国にあって民族の正月を祝うということは、その思い入れもひとしおなのでしょう。何か月も準備、練習を重ねてきたということで、普段のおとなしい印象とは異なり、歌や踊りなど素晴らしく、初めて見る私にとってはことのほか興味深く楽しいものでした。特に、顔にメーキャップをしてコミカルに踊る（日本風にいうと、ヒョットコがどじょうすくいをしているような）演し物のときは、会場からやんやの喝采で盛り上がったものでした。

あるとき食事に呼ばれました。テーブルがあるにもかかわらず、床にじかに広い布を敷き、そこに大皿のごはんや料理をいくつも並べ、各自つつき合って食べるというやり方でした。それはとてもくつろいだ雰囲気で、私は日本のお花見を連想してしまいました。何だかすべてに鷹揚でコセコセせず、子どもへの接し方にもそれが感じられました。戦乱に追われなければ、さぞやゆったりと心豊かに暮らしておられた人々なのだろうということが察せられました。

元兵士だったという青年たちは、戦争のことを沢山語ってくれました。当然のこととして平和を享受し、青

私たちのすすめる2冊の本

東京都文京区　松宮 香洋

やせっぽちのチア

梁（リャン）敏子（ミンジャ）・手島悠介／文
こさかしげる／絵
ほるぷ出版・刊
一一〇〇円

娘と一緒に「幼い難民を考える会」の例会に出席したことがあります。娘は甘いケーキも少女小説も好きなごく普通の小学5年生です。例会では、カオイダンキャンプのビデオを見せていただき、『やせっぽちのチア』と『たみちゃんと南の人びと』の2冊をお借りして帰りました。

自分と同じくらいやせっぽちのチアや、日本の子ども代表のたみちゃんを通して、娘は南の国の人々を身近に感じ始めたようです。2冊の本は、豊かで安全な日本に住む私共が見失いがちな平和な暮らしと命の大切さを強く訴えかけてきます。

たみちゃんと南の人びと

21世紀をともに生きる地球の仲間／編
明石書店・刊 1000円

この本を読んだあと、娘と将来の職業について話し合いました。娘は先生になりたいと小さい頃から言っていました。理由は、小学1年生のとき担任していただいた先生がステキだったからという他愛もないものです。でも、今度は違いました。大好きな父さんも母さんも弟も殺されたチアの話を読み、難民の子どもたちのことを知って、娘の中で何かが変わったようです。

先生やお医者さん、看護婦さんが憧れの職業であるのは世界中の子どもたちに共通です。でも、難民になってしまった子どもたちと自分たちには、その職業につきたいという決心の強さに大きな違いがあると娘は言います。両親や兄弟が目の前で死んだり、家を焼かれたりした子どもたちは、人間にとって何がいちばん大切なのかを知っています。そしてその子どもたちが、自分の境遇にめげず、みんなの役に立つ人間になろうと希望をもって努力しているのには、娘も私もかえって励まされ、元気づけられてしまったのです。

子どもたちは、大人になってしまった私たちよりも、はるかに多くの時間を持っています。その時間を人間にとっていちばん大切なものを守るために使ってくれるなら、どんなによりよい社会をつくりあげることでしょう。私共大人も、その子どもたちを支え、次の世代につながる道の地ならしをしていきたいですね。

春を謳歌していた私にとって彼らのひと言ひと言がどれほど重いことばとして迫ってきたかわかりません。

この地球上で戦火に喘ぎ、それによって不本意な生活を余儀なくされている人々が、まだまだ大勢います。同じ地球の上で、同じ時代を生きている私にとって為すべきことは何なのか、それを考えるきっかけとなったのが難民の方たちとの出会いであったと思います。

自由な高校で学んだこと

宮城県
仙台市

高野 紫（ゆかり）

1985年4月に開校した自由の森学園高等学校に、私は1期生として入学しました。偏差値や外見だけで生徒を判断してしまう大人や教師たちに疑問をもっていたこと、そしてそれらをなくし、真の人間として生きていくことを学ぶことを目標とするこの学園を選びました。

3年間、様々なことがありました。校則や試験のないことによってそれが自由であると思い、好き勝手にやり、多くの不自由を生んでしまったこともありました。何もないところから教師と生徒と親とが一緒になって考え、つくり出していくことはとてもむずかしく、しかしそれ以上に楽しく、また一生懸命になれる自分を見つけることもできました。

学園では受け身のままでは何も起こらず、また楽しいこともやって来ませんでした。自分たちが動き出すことによって初めて、何かが始まったのです。受け身でいた中学時代までを、ときには「楽でよかった」と思うこともありましたが、人は受け身のままでは自立できず、またそれは自由ではないということを知りました。制服や髪型が決まっていないから自由なのだと思われてしまう今の社会は哀しくさみしいことだと思います。考えさせてくれる時間、場所、仲間が存在したことは、学園の求める自由の一つだったと思います。

また、数多くのものに触れ、見て、聞き、体験できた3年間でした。その間、多くの人々に出会い、ヒトについて考えさせられました。そのなかには、ベトナム、ラオス、カンボジアの難民の友だちもいます。そしてヒトはやはり、一人では生きていけない最も弱い動物であり、最も優しさを持った動物だと思いました。自由の森学園で、私はヒトの優しさ、自由の素晴らしさとむずかしさを知ることができたと思います。大学生となった今、学園での3年間の思い出は、大きな支えとなっています。

幼い難民を考える会との出会い

熊本県
熊本市

世良 喜久子

昨年の冬のこと、あるボランティアグループに参加していた私と友人たちは、難民とも認められない何十万もの人々がタイとカンボジアとの国境周辺にいて、タイの大問題になっていることを知りました。

私たちにできる何か救援の方法をということで、そのときは募金しか考えつかず、もっと何かできることはないものかと、物足りない思いでおりました。

カオイダンの子どもが描いた絵。CYRの絵ハガキより。

そこで、難民についての資料や、活動しているグループはないものかと、熊本で探したのですが、結果は何も見当たらず、さみしい現実を目のあたりにしただけでした。

日本は、先進国、経済大国と言われていますのに、難民受入れは世界で12番目（1988年末）、難民条約に加入したのもやっと世界で81番目と知り、先のことと考え合わせて、こんなことでよいのだろうかと思ったのが実感でした。

このようなときに、友人から教えられたのが〝幼い難民を考える会〟でした。早速、資料を送ってもらい友人たちと入会しました。

まず、カオイダンキャンプでのビデオを借りて、数人の友人たちと見る会を開きました。ビデオを見た友人のなかには、飢餓難民の姿を想像していたけれど、思いのほか明るい表情の子どもたちの姿にほっとしたという人もいました。

また、日赤から難民キャンプに医療チームの一人として出かけられた経験のある先生に、スライドを見せていただきながら、キャンプの様子などをお聞きしました。

このような熊本での友人たちとの勉強会を通して、やっと難民というものが少しわかってきたところです。

そして、この会（CYR）が、現地で子どもに対する保育や、親への教育など、直接奉仕をされていることに感動し、また、その地道な活動に頭のさがる思いがいたしました。熊本でも、CYRに対する応援の輪が広がるように勉強を続けていきたいと思っております。

地域の人と祝うお正月

――今年は神奈川県相模原市で

前日のどしゃぶりの雨で大掃除をすませた4月19日は快晴。桜が満開の気持ちのいい朝を迎えました。

儀式の始まる予定の9時30分より少し遅れ、あわてて会場の宮の上団地（神奈川県相模原市）に着くと、人かげはまばら、数人の男性が準備をしていました。まだ人が集まっていないので始まりは11時からと言います。オレンジの袈裟をまとったお坊さんはもう座って待っているというのに……でもお坊さんは気にする風もなく、にこにこしています。集会室には祭壇がつくられ、中央に托鉢の鉢が並べられています。

11時が近づくと、テントが建ち、あちこちの家から料理が運ばれ、何もなかった駐車場はあっという間にパーティー会場へ変わってしまいました。離れた所に住むカンボジアの人たちもたくさん集まってきました。集会室では、人々が托鉢を済ませて座っていきます。年長の人を敬う気持ちを大切にするカンボジアの伝統に従い、目上の人がいっぱいになったら外に出る、という条件付きで私も読経の場に参列させてもらいました。若い人はほとんど参列せず、外でおしゃべりしているのは、遠慮しているためなのか、それとも久しぶりの友人とのおしゃべりの方が楽しいからだったのでしょうか……。

30分程のお経のあと、外に作られた小さな祭壇のまわりを輪になって歩き、小さな仏像にひとりひとり桜の枝でやさしく水をかけ、儀式は終わりました。

カンボジア青年のバンドの演奏と、団地の女の人たちが徹夜で作った料理を囲んでのパーティーの始まりです。お年寄りが中心だった儀式とはうってかわり、今度は若い人が盛り上げます。お腹がいっぱいになるとすぐにダンスが始まりました。集会室の前では、男性チームと女性チームに分かれてのゲームも始まっています。日本でも昔はそうだったそうですが、カンボジアではお正月のゲームは若い男女が知り合う貴重な機会だそうです。この間、お年寄りやお坊さんは集会室で輪になって食事をし、寄付金の読み上げなどをしています。こちらもまるで日本のお祭りの時のようです。

日本での歴史がまだ新しいカンボ

ジアの人たちがどうやってその伝統を伝えていこうとしているのか、そんなちょっと意地悪な興味を持って覗いた「お正月」――カンボジアの人たちはそんな難しいことは考えず、それぞれが好きな形で楽しく参加しているようでした。おそるおそる覗きにきた団地の日本の人も、どんなものか興味を持って訪れた日本人も、お客様としてでしたが喜んで受け入れてくれた「お正月」。私たち日本人もカンボジアの人たちと一緒に心から祝う気持ちで参加できるような関係を築いていけたらいいなあと感じた1日でした。　（記／小川由美）

ご寄付いただいた方々

1988年10月～1989年6月

（敬称略）

北海道
帰山ひとみ（札幌市）
砂田　絹子（〃）
札幌聖心女子学院（〃）
山鼻カトリック教会（〃）
松浦　芳子（岩見沢市）
ロース幼稚園（小樽市）
小川　ヨシ（北見市）
藤田　康子（亀田郡）
北桧山教会日曜学校（瀬棚郡）
小山田　彰（古宇郡）

青森県
佐藤美千代（青森市）
白石　富子（弘前市）
弘前学院聖愛高校宗教部（〃）

岩手県
浜田　正美（宮古市）
佐藤　重幸（岩手郡）

宮城県
森合　松美（仙台市）

秋田県
秋田ビューホテル（秋田市）

福島県
遠山木乃美（会津若松市）
高木芳久・二三四（いわき市）
藤田　侑子（二本松市）

茨城県
関口　博美（牛久市）
佐藤　生子（北茨城市）
小山友の会（古河市）
松添仁・和美・郁夫・卓夫（つくば市）
山本満喜・泰路（鹿島郡）

群馬県
藤田喜代子（高崎市）

埼玉県
吉原　尚秀（浦和市）
八尾史江子（岩槻市）
福元　千里（春日部市）
木村　稔子（川口市）
小林恵美子（〃）
岡田　和子（川越市）
冨田　清江（〃）
柏木三知子（越谷市）
八重ゆかり（所沢市）
臼井　保恵（新座市）
菅　孝（飯能市）
石山　民子（入間郡）
東京聖書集会（北足立郡）

千葉県
石山　公子（千葉市）
鬼崎　貞子（〃）
加藤　くみ（〃）
鈴木　健之（〃）
三輪美枝子（〃）
国府台聖愛乳児園職員一同（市川市）
鷲見和佳子（浦安市）
土谷美知子（柏　市）
米山緋紗子（〃）
篠原　登代（鎌ケ谷市）
矢ケ部留美子（木更津市）
江戸川台子供の家（流山市）
川口　昌宏（船橋市）
森島　正子（〃）
安保　恵（松戸市）
服部　三郎（〃）
濱谷きみ子（四街道市）
遠藤　清司（印旛郡）

東京都
うめだ「子供の家」（足立区）
香川　澄子（〃）
小坂　一代（〃）
宮垣満智子（〃）
山極小枝子（〃）
井ノ部百合子（荒川区）
笠原　和子（〃）
山路　圭（〃）
塩見　和子（板橋区）
根本　晶子（〃）
平山　辰雄（〃）
小岩教会教会学校（江戸川区）
小島　正子（〃）
家良　千秋（〃）
鈴木　重子（大田区）
瀧川　嘉子（〃）
千葉富貴子（〃）
中村　育民（〃）
仁科　豊子（〃）
日本キリスト教団
田園調布教会（〃）
萩原美恵子（〃）
フライングバード'84（〃）
御巫　瑛子（〃）
国保　征子（北　区）
牧野　光雅（江東区）
目黒方面子供グループ（品川区）
川上　清文（〃）
小林　治子（〃）
多野　トシ（〃）
人見伊津子（〃）
山岸　早苗（〃）
渡辺　道子（〃）
井上　一夫（渋谷区）
大滝　弘子（〃）
尾平佳津江（〃）
坂本　恵子（〃）
聖心会第一修道院（〃）
聖心会第三修道院（〃）
高橋　悠治（〃）
田代　泰子（〃）
田尻　陽子（〃）
永井靖子・祥代（〃）
野田弥重子（〃）
東　千秋（〃）
星田　トヨ（〃）
松岡　玲子（〃）
真鍋　清加（〃）
毛利　恭子（〃）
吉田　秀子（〃）
鵜沢　知子（新宿区）
風間　梧耀（〃）
斉藤　隆子（新宿区）
フレンドシップアジア委員会（〃）
モンテッソーリ
御苑こどもの家（〃）
湯川れい子（〃）
淀橋第四小学校読書サークル（〃）
Dabid Weinberg（〃）
田島真理子（杉並区）
原田由紀枝（〃）
青柳　踊子（世田谷区）
安藤知代子（〃）
池田透・知嘉子（〃）
石沢　政子（〃）
太田　晴子（〃）
小沢　篤子（〃）
笠原　泰（〃）
加藤　智子（〃）
亀山　泰子（〃）
小林智恵子（〃）
澤田　祐子（〃）
真愛幼稚園（〃）
水道局世田谷西営業所（〃）
成城学園高等学校
ロックサークル同好会（〃）
関口　晴美（〃）
津田　綏子（〃）
日本キリスト教団松沢教会
田の光グループ（〃）
三保　元（〃）
津賀都留子（中央区）
浅井　陽子（千代田区）
イグナチオ教会L.カンガス神父水曜クラス有志（〃）
石原喜和子（〃）
暁星学園幼稚園（〃）
クラウス・ルーメル（〃）
大石　敦子（豊島区）
小島　礼子（〃）
鈴木　ヨシ（〃）
高橋　恵子（〃）
湯原（〃）
小倉　松枝（中野区）
谷口　洋子（〃）
永戸　恭子（〃）
長谷川いく子（〃）
広戸　道夫（〃）
古谷　寿子（〃）
村山みつ子（〃）
大鹿　恵子（練馬区）
坂本　宏（〃）
汐碇　紀子（〃）
武藤徹一郎（文京区）
伊吹　佑子（港　区）
榎並　瑛子（〃）
岡田　典子（〃）
河野　昌子（〃）
木村　久子（〃）
黒川　百合（〃）
小森美保子（〃）
坂根はるみ（〃）
聖心会三光町修道院（港　区）
聖心会ドシェーンハウス（〃）
聖心女子学院もゆる会（〃）
聖心女子専門学校（〃）
聖心女子学院さつき会
コーラスサークル（〃）
聖パウロ女子修道会（〃）
東洋英和女学院東光会（〃）
畠中ルイザ（〃）
福島あや子（〃）
ブ・トロン・ヤ（〃）
堀　信子（〃）
丸茂　富子（〃）
前内祥周・節子（〃）
吉行　章子（〃）
加藤　幸子（目黒区）
駒場幼稚園田の会（〃）
坂口　冬子（〃）
笹生　博夫（〃）
田所健太郎（〃）
新倉　省三（〃）
日本キリスト教団
碑文谷教会（〃）
木庭　菊枝（秋川市）
多摩川幼稚園（〃）
熊谷ことぢ（青梅市）
内藤信明・萬里子（小金井市）
三宅　みち（〃）
小澤佐重喜・喜誉史・和子（国分寺市）
中西　信子（小平市）
堀内　ツル（〃）
武藤　好子（立川市）
堀内俊太郎（多摩市）
幸田成人・宏子（調布市）
小林　直樹（八王子市）
本橋　栄（日野市）
小林勢以子（府中市）
聖イリナモンテッソーリスクール（〃）
飯尾香織・美園（町田市）
近藤　育（〃）
聖アンナこどもの家（〃）
S. S. YUWADY（〃）
渡辺　典子（三鷹市）
佐久間羊子（武蔵野市）
メリノール会（〃）
柳瀬　仰子（大島町）
芝野　雅一（八丈町）

神奈川県
鍵山真由美（横浜市）
小久保卓二・ふさ子（〃）
近藤　セキ（〃）
佐野　克行（〃）
田島　敏子（〃）
田中　仁（〃）
チベット難民児童奨学会（〃）
長尾　俊（〃）
萩原　久子（〃）
平山　知学（〃）
モンテッソーリ
美しが丘こどもの家（〃）
横浜雙葉小学校（〃）

横浜みこころ幼稚園(横浜市)
若竹　芳子　(〃)
渡辺　雅子　(〃)
山崎　尚美　(小田原市)
近藤　雅広　(鎌倉市)
藤井　節子　(〃)
丸山　圭子　(〃)
藪野　栄子　(〃)
伊藤　恵子　(川崎市)
大坪　　進　(〃)
加藤研太郎・玲奈　(〃)
カトリック鶴沼教会(〃)
高橋　良夫　(〃)
堤　　義治　(〃)
松井円・純　(〃)
森戸　　潔　(〃)
越島　陽子　(逗子市)
高澤　治江　(〃)
高橋万里子　(〃)
横畑　雅子　(〃)
たんぽぽの会　(茅ヶ崎市)
ともしび会　(〃)
中村　由子　(秦野市)
川村　栄子　(藤沢市)
重村　三代　(〃)
バイニイ　(〃)
鈴木いぶき・麦穂　(中　郡)
原殷・千鶴子・英修・義晴・瑞穂　(〃)
谷津　孝一　(三浦郡)

山梨県
中村由美子　(都留市)
大東香代子　(中巨摩郡)
雨宮　利雄　(東八代郡)

長野県
有賀　芳子　(伊那市)

新潟県
阿部　　清　(新潟市)
村上　一枝　(〃)

富山県
大沢　まり　(魚津市)

石川県
七尾市立図書館読書サークル有志　(七尾市)
岩本　玉蝶　(松任市)

福井県
廣方　重俊　(福井市)
井　　徳奉　(〃)

岐阜県
岡本　晴子　(岐阜市)

静岡県
南荘宏・敬子　(静岡市)
自然食品健康友の会(熱海市)
土山　武子　(伊東市)
聖心会裾野修道院　(裾野市)
不二聖心女子学院シスター塚前　(〃)
不二聖心女子学院温情の会　(〃)
今井野梨子　(浜松市)
鈴木　真樹　(〃)
高根　妙子　(三島市)

愛知県
伊藤はつ子　(名古屋市)
井上道雄・貞子　(〃)
土田　友章　(〃)
中原　信生　(〃)
原　マユミ　(名古屋市)
杁山　尚伸　(一宮市)
楠本　千穎　(春日井市)
関口　紘子　(小牧市)
岡本　啓子　(知立市)
高橋　仁見　(豊川市)
豊田婦人ボランティア　(豊田市)
上田　豊子　(愛知郡)
松山　千恵　(〃)
伊藤　洋子　(海部郡)

三重県
奥山　卓司　(久居市)

京都府
伊崎　佳明　(京都市)
亀井　正子　(〃)
喫茶アトリエ　(〃)
谷口雅一・次郎　(城陽市)
荒賀　房夫　(宮津市)
難民援助宮津カトリックの会　(〃)

大阪府
秋田　恭江　(大阪市)
伊東　峰明　(〃)
田原　正昭　(〃)
吾野　佳子　(〃)
野老山田鶴子　(堺　市)
立石三月子　(和泉市)
榊　　哲夫　(茨木市)
今村　　昨　(吹田市)
上水口辰雄　(摂津市)
西島已美子　(大東市)
大杉　利幸　(豊中市)
三浦　正校　(富田林市)
聖田女学院小学校(寝屋川市)
菊地　恵子　(枚方市)
被昇天女子短期大学(箕面市)
太田　憲治　(守口市)
キリスト教保育専門学校　(三島郡)

兵庫県
加藤喜代子　(神戸市)
神戸平安教会婦人会(〃)
平賀　文子　(〃)
広戸　重雄　(〃)
宮前　峰子　(〃)
石渡　要蔵　(芦屋市)
稲畑美喜子　(〃)
岡本　豊子　(尼崎市)
小川　正子　(〃)
木ノ本みえ　(〃)
松嶋　吉則　(伊丹市)
浅沼　健一　(宝塚市)
阪田　ミエ　(〃)
鍵山世都子　(西宮市)
黒田　佳治　(〃)
西宮一麦教会　(〃)
宮沢　明子　(〃)
岸本　征与　(西脇市)
小林　壮一　(多紀郡)

奈良県
今村　洋子　(奈良市)
山西　睦子　(橿原市)
大和郡山カトリック幼稚園　(大和郡山市)
大方　せつ　(生駒郡)

和歌山県
白水　路子　(東牟婁郡)

岡山県
日本キリスト教団岡山信愛教会　(岡山市)
高木　唱洋　(赤磐郡)

広島県
久保　　(広島市)
田川　泰資　(〃)
土井　竜子　(〃)
日本キリスト教団広島教会まきば会　(〃)
最上　浩子　(〃)
金尾アツ子　(三原市)

山口県
藤井　　操　(光　市)
久楽　由雄　(防府市)

香川県
小西ひとみ　(高松市)
田村　　保　(〃)

愛媛県
松山友の会　(松山市)

高知県
池沢　潤子　(高知市)

福岡県
安藤　玲子　(福岡市)
柾野　祥子　(〃)
大垣　洋子　(〃)
木上　絹枝　(〃)
日本キリスト教団福岡玉川教会　(〃)
福岡女学院中高校　(〃)
福岡友の会幼児生活団　(〃)
福岡雙葉高校　(〃)
みなと保育園　(〃)
古賀　徳子　(久留米市)
古賀山敏康　(遠賀郡)
宮浦小百合　(粕屋郡)

長崎県
大久保チマ　(諫早市)

熊本県
青木　　悟　(熊本市)
大津山敏子　(〃)

大分県
松山まり子　(大分市)

宮崎県
佐田　安明　(日向市)

住所、氏名不明
板橋北消印、今治消印
大船消印、小金井消印
渋谷消印、新宿消印
立川消印、新潟消印
別府消印、武蔵野消印

物品を寄せられた方々

1988年10月～1989年4月
(敬称略)

北海道
札幌聖心女子学院　(札幌市)

岩手県
松本千寿子　(北上市)

茨城県
新谷　修一　(筑波郡)

栃木県
角田　真美　(宇都宮市)

埼玉県
米山　英子　(浦和市)
建部貴由美　(上尾市)
一志　悦子　(岩槻市)
八尾史江子　(〃)
岡田　和子　(川越市)
阿部　幸子　(狭山市)
勝田　　薫　(所沢市)
新座市立朱小学校5年1組　(新座市)
本間　雅彦　(〃)
柳沢　友美　(〃)
中島　孝枝　(北葛飾郡)
金子　節子　(南埼玉郡)

千葉県
阿尾るみ子　(千葉市)
鬼崎　貞子　(〃)
加藤　くみ　(〃)
上原ひろみ　(市川市)
坂本　　修　(浦安市)
小幡　茂子　(君津市)
久能　基子　(習志野市)
木下　信子　(船橋市)
大野智枝子　(松戸市)

東京都
小沢　則江　(足立区)
片野　洋子　(〃)
本房　優子　(〃)
磯　　泉　(荒川区)
亀山エミ子　(〃)
山路　圭　(〃)
飯塚　孝子　(板橋区)
角田　恵　(〃)
萩原　珠代　(〃)
柳井　克子　(〃)
青木英明・桂子　(大田区)
荒木　啓幸　(〃)
伊東みちい　(〃)
岩井　美樹　(〃)
岡　富美子　(〃)
田島加奈子　(〃)
田中美佐子　(〃)
藤倉　　芳　(〃)
中島　寿人　(〃)
仁科　豊子　(〃)
石川　雅子　(葛飾区)
大橋きよ子　(〃)
佐藤　貞雄　(〃)
西村佳津子　(〃)
岩田　牧子　(北　区)
上野　芳江　(〃)
佐藤斤三郎　(〃)
林　　国洋　(〃)
水野　哲子　(〃)
大澤　昭子　(江東区)
藤原　久芳　(〃)
狩野　知子　(品川区)
神野　美樹　(〃)
鈴木　君代　(〃)
関口加代子　(〃)
田中美根子　(〃)
中村医院　(〃)
吉田　和子　(〃)
伊東止女子　(渋谷区)

岩田由美子　（渋谷区）
大野田美子　（　〃　）
荻野　敏久　（　〃　）
加藤　.郷　（　〃　）
小島　三雄　（　〃　）
小林　裕子　（　〃　）
YURIKO CHANG
（　〃　）
寺田萬理子　（　〃　）
戸田　道子　（　〃　）
橋木　浩司　（　〃　）
中村　義子　（　〃　）
奈良岡　（　〃　）
成瀬　啓子　（　〃　）
林　香代子　（　〃　）
深堀美代里　（　〃　）
古川　弘美　（　〃　）
松岡　玲子　（　〃　）
的場　（　〃　）
向井　民　（　〃　）
森　伊千雄　（　〃　）
鵜沢　知子　（新宿区）
波川　朗子　（　〃　）
中島　朋子　（　〃　）
原口　源信　（　〃　）
日比谷寿美子　（　〃　）
水上靴店　（　〃　）
加藤　武生　（杉並区）
川崎恵美子　（　〃　）
川島　浪子　（　〃　）
杉村　ふさ　（　〃　）
鳥栖　良子　（　〃　）
蛭田　（　〃　）
藤野美知子　（　〃　）
藤本紀世子　（　〃　）
松本　尚子　（　〃　）
浅井美奈子　（世田谷区）
浅賀　要子　（　〃　）
井之上真紀子　（　〃　）
井上美恵子　（　〃　）
岡本巳伊子　（　〃　）
奥野　幸子　（　〃　）
加藤　徹　（　〃　）
坂戸　雅子　（　〃　）
小林　敏子　（　〃　）
小林　道子　（　〃　）
白石美千子　（　〃　）
鈴木　照枝　（　〃　）
高島　元子　（　〃　）
高見　公雄　（　〃　）
民谷　洋子　（　〃　）
津田　綾子　（　〃　）
徳永　朝子　（　〃　）
中島　静子　（　〃　）
松本　悦子　（　〃　）
真鍋　圭作　（　〃　）
宗像　幸子　（　〃　）
森米店　（　〃　）
柳澤由美恵　（　〃　）
鬼崎ひとみ　（台東区）
芝崎　英子　（　〃　）
竹内　友規　（　〃　）
菊池　明美　（中央区）
鈴木　良子　（　〃　）
石原小枝子　（千代田区）
パワーテック　（　〃　）
金指　衣江　（豊島区）

鈴木　千代　（豊島区）
力石新太郎　（　〃　）
原　加賀子　（　〃　）
星野幸夜子　（　〃　）
宮河　繁治　（　〃　）
若松　博子　（　〃　）
旭野　俊之　（中野区）
伊藤　美子　（　〃　）
中村　義昭　（　〃　）
永戸　恭子　（　〃　）
長谷川いく子　（　〃　）
星野　トシ　（　〃　）
松岡　享子　（　〃　）
矢代　明子　（　〃　）
飯田　昌美　（練馬区）
上原　輝也　（　〃　）
小野　薫　（　〃　）
鈴木リエ子　（　〃　）
隅崎かつよ　（　〃　）
田中悠紀子　（　〃　）
長谷川　（　〃　）
松崎　博善　（　〃　）
湯浅　健　（　〃　）
竹内　久枝　（文京区）
長谷川章華　（　〃　）
村主　敦子　（　〃　）
渡辺　純子　（　〃　）
綾部　徳子　（港　区）
石毛　巫子　（　〃　）
尾沢　（　〃　）
川崎留理子　（　〃　）
河野　昌子　（　〃　）
久能木　光　（　〃　）
黒川　百合　（　〃　）
国分　昌子　（　〃　）
崎川由美子　（　〃　）
佐久間英子　（　〃　）
組織工学研究所　（　〃　）
田辺　ゆり　（　〃　）
鳥井　陽子　（　〃　）
永田　典子　（　〃　）
西野　直子　（　〃　）
波多野博子　（　〃　）
福島あや子　（　〃　）
福住　帛子　（　〃　）
藤岡　よね　（　〃　）
前内　節子　（　〃　）
山田久美子　（　〃　）
大塚　恵子　（目黒区）
河村なぎさ　（　〃　）
木村　厚子　（　〃　）
小林　道子　（　〃　）
鷹場幼稚園田の会　（　〃　）
斉藤　友子　（　〃　）
枝光会付属幼児研究所
田の会　（　〃　）
枝光学園幼稚園田の会
（　〃　）
芝　節子　（　〃　）
島田ミエ子　（　〃　）
白藤　由美　（　〃　）
高橋　悦哉　（　〃　）
谷口　隆子　（　〃　）
中野久光子　（　〃　）
早出　高子　（　〃　）
東山住区住民会議　（　〃　）
深町　陽子　（　〃　）

福田　辰治　（目黒区）
福原　和子　（　〃　）
山澤百合子　（　〃　）
山本　道子　（　〃　）
青木久美子　（青梅市）
岩本　雅歌　（小平市）
松本　正子　（立川市）
荒川　洋子　（調布市）
大塚ゆり恵　（　〃　）
池田あき子　（府中市）
深津　高子　（　〃　）
飯田　文子　（町田市）
大澤　恭子　（　〃　）
浅見　智子　（三鷹市）
岩田　澄江　（武蔵野市）
田中　双葉　（　〃　）
柳沢和男・和子　（　〃　）
神奈川県
合本　節江　（横浜市）
小川　房江　（　〃　）
グループ友　（　〃　）
瑞間　浩代　（　〃　）
関　和子　（　〃　）
頓田　幸子　（　〃　）
内藤美代子　（　〃　）
中島　健次　（　〃　）
長尾　俊　（　〃　）
野口　樹里　（　〃　）
浜田　秀子　（　〃　）
藤田　玲子　（　〃　）
御子柴能子　（　〃　）
小林しめ子　（鎌倉市）
伊藤　恵子　（川崎市）
加藤研太郎・玲奈　（　〃　）
古宇田千代子　（　〃　）
富岡　孝子　（　〃　）
中野　康子　（　〃　）
福田　千夜　（　〃　）
山内　鷹子　（　〃　）
神谷　博子　（相模原市）
森　淑江　（逗子市）
飯島加与子　（藤沢市）
宗　美樹子　（　〃　）
宇都宮ゆり江　（大和市）
田中　純子　（　〃　）
今井野梨子　（中　都）
新潟県
田村　慶次　（新潟市）
中林　虎三　（　〃　）
村上　一枝　（　〃　）
福井県
福井県社会福祉協議会
（福井市）
静岡県
平田ひろ子　（三島市）
愛知県
伊藤はつ子　（名古屋市）
大島　朋子　（大府市）
滋賀県
川崎マリ子　（近江八幡市）
京都府
伊崎　佳明　（京都市）
松尾　光雄　（　〃　）
山本麻起子　（　〃　）
松村　恭子　（宇治市）
大阪府
㈱日本エミック　（大阪市）

いずみ市民生協コープ
桑原店協議会　（和泉市）
坂本　晴代　（吹田市）
中神　正義　（　〃　）
兵庫県
大串ゆかり　（神戸市）
小副川美樹　（　〃　）
土山　正己　（　〃　）
橋本　弥生　（　〃　）
奈良県
小西　豊子　（奈良市）
和歌山県
松井　保子　（新宮市）
鳥取県
龍地　（米子市）
岡山県
関　修枝　（岡山市）
渡辺和子・有元清枝（　〃　）
香川県
長坂ますこ　（高松市）
吉田　恭子　（　〃　）
愛媛県
柿本フサ子　（松山市）
福岡県
大坂　洋子　（福岡市）
高田　まみ　（　〃　）
蓮尾　エリ　（　〃　）
古賀　徳子　（久留米市）
沖縄県
富山清貴・哲美　（沖縄市）

ご協力ありがとう
ございました。

CYRきのう・今日

アドバイスグループ(仮称)ができました！

会員有志による新しいグループが誕生し、去る7月1日第1回目の集まりがありました。

このグループは、仮称アドバイスグループで、会員が自由に意見やアイディアを出し合い、会の活動を活発化することを目的としています。

世話人は、CYRができた当初からボランティアとして関わっている小沢篤子さん、田中朗子さん、佐藤和子さん、栗野美代子さん。会員や関係者ならどなたでも参加できます。

今まで話し合われたのは、会員への呼びかけ方、ひらがなの新聞のための募金などについてで、このうちのいくつかと事務の手伝いは早くも実行に移されています。

次回打合せは9月2日(土)11時から1時まで、事務所で行ないます。地方の会員で興味をお持ちの方には、打合わせの記録をお送りします。事務局までご連絡ください。

『こんにちはCYRです』希望者への送付になります

昨年9月に創刊した、ひらがなの新聞『こんにちはCYRです』は、今まで定住した人たちだけでなく、会員、関係者、関係団体に広く配布してきました。しかし送料がかさむため、4号（9月末発行予定）からは希望者のみに送付したいと思っています。

日本に住むインドシナの人たちには、今まで通り無料でお送りします。それ以外の方で新聞送付ご希望の方は、ご面倒ですが事務局までご一報ください。

情報スクラップ

——催物・講座・スタディーツアー

関東以北

★CCWA（基督教児童福祉会・国際精神里親運動部）の集い

CCWAモロンセンターのセンター長とCCWAタガイタンセンターのソーシャルワーカーを招いての活動報告会、交流会

8月22日　岩手県盛岡市
8月23日～24日　宮城県仙台市
8月26日　東京・渋谷「子どもの城」
8月29日　札幌市
8月30日　函館市

詳しい場所、時間は直接下記まで。
☎03-399-8123

★モン族の刺しゅう絵本展——タイバンビナイ難民キャンプの子どもたち

8月21日(月)～26日(土)
10:00～18:30(26日17:30まで)
於：丸善・日本橋4階ギャラリー
8月26日(土)　安井清子（お話しキャラバン）の講演。於：丸善第2ビル会議室 14:00～16:00　☎03-945-0981曹洞宗ボランティア会

★ハンド　トゥ　ハンド　バザール

9月7日(木)～10日(日)　於：神奈川県相模原市アイワールド新館3階障害者の製品と第3世界の製品の販売　☎0427-62-5215　尾崎

★英会話講座

期間：89年9月27日～90年3月9日
於：神奈川県国際交流協会
昼クラス　13:30～15:00
夜クラス　18:15～19:45
週1回　受付：9月10日(日)のみ
初級、中級、上級のクラス分けのヒヤリングテストあり。受付時間が限られているので詳しくは直接下記まで。受講料：32000円(税別)　☎045-671-7070

★国際理解教育講座「インドシナ難民と日本」

第3回10月2日(月)、第4回90年1月29日いずれも14:00～16:30
於：綾瀬市中央公民館3階講習室
講師：シンカムタン・レック（姫路定住促進センター第1期生・在綾瀬市）　第1回「ラオスの生活と日本」(6月)、第2回「ラオスの教育と日本」(7月)は終了。
3、4回では参加者からの質問に答える。主に学校の先生を対象にしているが一般の人も参加できる。
主催：綾瀬市教育研究所
☎0467-77-1111綾瀬市役所内

関西

★旅フォーラム'89「アフリカのまつりと伝統芸能」　8月22日(火)
講師：端　信行（国立民族学博物館助教授）　於：大阪国際交流センター　18:30～20:00 会費1000円　要申込　06-773-8989

★世界の女たちシリーズ「イスラムの女性」　8月26日(土)
片倉とも子（国立民族学博物館教授）の講演、バリ島ダンス、ゲームなど。於：大阪市立北市民教養ルーム　16:00～　無料。イスラムを知る会　☎06-653-0622

〈編集後記〉

発行がすっかり遅れてしまいすみませんでした。22号とあまりに間隔があいてしまったため「CYRきのう今日」の毎月のでき事は載せきれず割愛させていただきました。"きのう"のことより明日の情報のほうが役に立つのではと"情報スクラップ"始めました。いかがでしょう？内容その他につきどしどしご意見お聞かせください。ご意見と原稿は、いつでも大歓迎です。　（じゅん）